



Title	「『妖精の女王』 第1巻のアンチキリスト」
Author(s)	足達, 賀代子
Citation	Osaka Literary Review. 2020, 58, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『妖精の女王』第1巻のアンチキリスト」

足達賀代子

はじめに

「時」の超克はルネサンスの人々にとっても最大の関心事の一つであった。故藤井治彦先生はルネサンスの文学中に表れている「時」の観念とその下での人間の生き方を一貫して研究され、¹ 1987年の論考「叙事詩における「時」の克服——スペンサーとミルトン——」のなかで、スペンサーは『妖精の女王』において歴史の連続性、無常の中の不変性、「時」の終末と永遠の憩いの三つの点で「時」を超克しようと試みた、と指摘された。² このうち本稿では第三の点について考えてみたい。この第三の点は、いまだ解明すべき点が多いスペンサー作品における黙示思想の研究に光を当てる重要な指摘である。この光を頼りに本稿では、『妖精の女王』第1巻における黙示思想とその下での人間の生のあり方について考察を試みてみたい。

『妖精の女王』においては現世の生は完遂すべき労苦であり、憩いはその報償である。第2巻の主人公ガイアの霊的指導者である巡礼は、現世の生を「競走」や「疲れた小舟」での航海（『妖精の女王』II. i. 32. 7, 9）³ に喩え、ガイアが無事に「待望の港」（32.9）に到達して休めるよう神の加護を祈る。巡礼の言う「競走」は使徒パウロの言葉を踏まえている。パウロは「賞を得るように走りなさい」（コリント I 9:24）⁴ と述べているが、「賞を得るような走り方」とは永遠の憩いを得られるような理想的な生き方と考えてよいだろう。藤井先生は「時（time）」の中での「理想的な生（the ideal life）」についての考察へと進まれ、上の論考（「叙事詩における「時」の克服——スペンサーとミルトン——」）で、人間が自らの

全存在をかけて正しい行為を選び取るとき、その経験はその人の内面で永遠化され、その人は「時」を超克する、と述べられた。正しい行為を選び取る生とは悪との絶えざる戦いであり、パウロの言う「いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬ」くこと（ヘブル 12:1）に他ならない。上の巡礼は、『妖精の女王』第1巻の主人公、赤十字の騎士の天上での列聖を預言し、彼が永遠の憩いを約束されていることを祝福する（II. i. 32）。⁵ 彼が勝利した敵とは何ものであったのか。本稿では、『妖精の女王』に見られる黙示的終末思想を背景としつつ、赤十字の騎士の敵たちについて考察し、永遠の憩いを阻もうとする悪がいかなるものとして表わされているのか、第1巻「神聖の巻」を中心として考えてみたい。

黙示的終末思想

『妖精の女王』の最終連とされる箇所では語り手は次のように祈る。

動くものはすべて変化を喜ぶけれども、
 それ（「時」の終末）以後は、万軍の主と呼ばれる
 神とともに永遠に休息するであろうから。
 ああ、万軍の主よ、永遠の休息の日の姿を示し給え。

(VII. viii. 2. 6-9)

変化がなくなり、万物が神とともに永遠に憩う、という考え方は、「時」には終末があるとする終末論（eschatology）を前提としている。終末論では、「時」とは世界創造を始点、終末を終点とする線分のようなものと解され、世界の歴史は神の予定に従い終末に向かって一直線に進んでいく。その間、背神の勢力は常に人間を正しい道から逸脱させようとするため、終末論においては「善悪の抗争」という構図が常に意識される。終末にはキリストが再臨して最後の審判が行われ、正しき者は救済されて神とともに永遠に憩い、悪しき者は永遠に滅ぼされる。『妖精の女王』の語り

手は終末の後の永遠の休息の啓示を神に祈願しているが、このことから彼の終末観は黙示思想を帯びていることがわかる。「黙示 (apocalypse)」とは、終末とその後に関する人知の及ばない事柄についての神の「啓示」を意味するギリシア語 “*Ἀποκάλυψις*” を起源とし、『ヨハネの黙示録』の表題にも見られる語である。「黙示思想 (Apocalypticism)」は「黙示」に関する信仰、思想、運動などを意味する比較的新しい派生語だが、⁶ その来歴は極めて古く、古代、中世を通じ、またエリザベス朝においても一層の盛り上がりを見せた。⁷ なお、「終末思想」と「黙示思想」はしばしば互換的と見なされるが、後者を前者の一類型と解する学者も多い。⁸

『妖精の女王』の語り手は現世の空しさに倦み (VII. viii. 1. 6-7)、「朽ちるものが朽ちないものを〔中略〕着るとき」(コリント I 15:54)、すなわち終末を待望するが、終末がいつ到来するかは誰にもわからない。語り手の祈願は、自分が終末において救済に与ることを前もって知りたいという切望である。何故なら、救われる者たちは「その労苦を解かれて休」むことが許されるが(黙示録 14:13)、邪悪と審判された者らは「火の池」(同 20:14-15)に投げ込まれ、憩いの姿を見ることはできないからである。イングランドの宗教改革はエリザベス 1 世治下、宗教的決着に至り、プロテスタント信仰に基づいて「予定説」が正当とされ、救済に関する教義も一本化された。⁹ 「予定説」によると、ある人が救済されるか否かは世の初めより神の予定の中で定まっているが、それを予め知ることはできない。従って、語り手の願いは叶えられず、永遠の憩いの姿を予め見ることは通常はありえない。人間は自らが永遠の休息に与るかどうかわからないまま、地上の生の「競走」を完遂する他ないのである。現世が「善悪の抗争」の構図でとらえられる黙示的終末観においては、たとえ救済へと予定されている人間でも、現世の生は悪の力に絶えずさらされている。悪に陥らず、善を選び取ることは非常に難しく、「神聖の館」の女主人シーリアも、邪悪な生へと迷い込み我が身の破滅へと急ぐ者は多いが正しい道を選ぶ者は

稀である (I. x. 10) と述べている。

アンチキリスト

『妖精の女王』第1巻は、胸当てと盾に赤い十字のしるしのついた「神の武具」(エペソ 6:11) を帯びていることから「赤十字の騎士」と呼ばれる主人公が、多くの敵と戦いながら冒険の旅を続け、巨龍を倒した後、ユーナ姫と婚約に至る、という物語である。上述の語り手の祈りと同じく、第1巻にも黙示的終末思想が色濃く表れている。赤十字の騎士と龍との闘いの場面と『黙示録』中の大天使ミカエルが「巨大な龍」と闘う場面(12:7-9)との類似性は従来指摘されてきた。だが、この戦いの直前、語り手は詩神に呼びかけ、これから始まる戦いの歌の調子は低く抑え、激しく高い調子は後日のもっと恐ろしい戦いを歌う時まで留保するよう祈念する (I. xi. 6-7)。後日の恐ろしい戦いについて述べる語り手の言葉は黙示的表現に満ちている。この戦いはキリスト教世界の君主である妖精女王と彼女に敵対する「高慢な異教徒の王」(xii. 18. 8) との戦いを指す。赤十字の騎士が妖精女王の戦士としてその戦いに従事する6年間(18. 7)が、Hamilton が指摘するように創造から終末までの「時」を意味するならば、この戦いは終末に決する善悪の決戦と解せる。¹⁰ この決戦の歌は詩神の喇叭の音 (xi. 6. 6) で始まり、天地をおののかせる (7. 5) が、このことは『黙示録』で天地を襲う終末の災禍が天使たちの喇叭で始まることを想起させる。

第1巻の「時」が上記のような黙示的雰囲気の中で終末に向かって流れるなか、赤十字の騎士は多くの敵と戦いながら現世の旅を続けていく。キリスト教黙示思想において邪悪な者とは、邪悪な霊の力と邪悪な人間の両方を意味する。このうち前者は「悪魔とか、サタンとか呼ばれ」(黙示録 12:9)、後者は「アンチキリスト」と呼ばれる。両者は同一視されることもあるが、¹¹ アンチキリストは「何よりも人間であるとされる点で、悪魔

とは異なる」(マッギン 2)。サタンや悪魔が「悪の霊」(エペソ 6:12)であるのに対し、アンチキリストは「血肉」(同)であり、人間や獣の姿(黙示録 13 参照)で表される。『妖精の女王』第 1 巻では、サタンは「高慢の館」に滞在しており、「7つの大罪」を表す館の女王ルシフェラと 6 名の顧問官を駆り立てているが(I. iv. 36. 1-4)、赤十字の騎士の面前に直接姿を現すことはない。彼の前に次々と現れる敵は、巨大な蛇形の「迷妄」、魔術師アーキメイゴー、異教徒の騎士サンズフォイ、その愛人で「虚偽」を表す悪女デュエッサ、サンズフォイの弟サンズジョイ、巨人オーゴーリオー、惨めな男の姿をした「絶望」、そして巨大な龍である。これらはサタンが率いる背神の勢力に与する者たちだが、より具体的な「血肉」として、すなわち個々の人間や獣として赤十字の騎士の前に現れる。このうちデュエッサは、明らかに『黙示録』の「大淫婦」(17:5)として表されているが、デュエッサ以外の 7 者はアンチキリストと考えてもよい。赤十字の騎士が直接戦うべき敵とは、これらアンチキリストたちである。

聖書中で「アンチキリスト」の語が初めて登場する『ヨハネによる第一の手紙』2:18 には「今や多くの反キリストが現れてきた。それによって今が終りの時であることを知る」と記されている。アンチキリストは唯一人であるとするアンチキリスト単一説も古くより存在するが、一般にはアンチキリストは多数出現し、終末は彼らの出現後に到来する、と信じられた。アンチキリストとは、「イエスのキリストであることを否定する者[中略] 父と御子とを否定する者」(ヨハネ I 2:22)であるとされている。他にも「にせキリストたちや、にせ預言者たち」(マタイ 24:24)、「自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」者(テサロニケ II 2:4)などと呼ばれ、また、『黙示録』の「七つの頭と十の角」のある龍(12:3)、「海から上って来る」獣(13:1)、「地から上って来る」獣(13:11)もアンチキリストと解されている。アンチキリストには古代よりキリスト教黙示思想のなかでも特に大きな関心が払われ、教会教父をはじめ多くの神学者や聖

職者、思想家がアンチキリストについて著作を残している。

アンチキリスト像の多様性と長い来歴の中での複雑な変化を記述する困難な試みのなかで、バーナード・マッギンは中世からルネサンスへと至るアンチキリスト像の標準化に大きく寄与したとしてアンティエ・モン・デールの修道院長アゾ（992年没）とフィオーレの修道院長ヨアキム（1202年没）を挙げている。アゾは、アンチキリストは大勢おり、「正しきことに敵対し、正しく生きる者を攻撃し、善きことを罵るあらゆる人々、俗人から聖職者、修道士に至るあらゆる人々」のことである、と述べている。¹² また、ヨアキムは『黙示録』12章の「七つの頭をもつ龍」を典拠とする「ドラゴンの図」¹³を作成し、龍の7つの頭は7人のアンチキリストを指すとし、それぞれの頭にヘロデとユダヤ人、ネロと異教徒、ムハンマドとサラセン人、サラディンらキリスト教会の迫害者とされる者たちを当てた。「究極の（もしくは最大の）アンチキリスト」と呼ばれる第7のアンチキリストが倒された後に教会が支配する神聖な時代が到来するが、その期限が満ちるとサタンが解き放たれ、善悪の決戦が行われる。このときサタンは第8の「最終のアンチキリスト」を召集するとヨアキムは考えている。ヨアキムのアンチキリスト観は、その後長くルネサンスに至っても影響力を保った。赤十字の騎士が戦うべきアンチキリストが7者であることには、ヨアキム以来の伝統の反映が認められる。また、複数出現すると信じられたアンチキリストを典型的に理解しようと試みた思想家たちも多く、例えばライヒャースベルクのゲルホー（1169年没）は終末までを4時代にわけ、各時代に出現するアンチキリストを流血、欺瞞、不浄、貪欲に結び付けた（*De quarta vigilia noctis*（『第四の見張り』）[1167]）。こうした類型化によって『妖精の女王』に登場するアンチキリストたちを整理することは難しい。だが、宗教改革を経て新・旧教両陣営がそれぞれ相手をアンチキリストと指弾した時代を反映して、赤十字の騎士を襲ったアンチキリストたちは唯一の真の教会としての英国教会やその信徒たちを迫害

するローマ教会や教皇を示す表象を帯びている。

第1巻のアンチキリストたち

第1巻で最初に現れるアンチキリストは半女半蛇の怪物「迷妄」である。大蛇レビヤタンがそう解されたように、蛇形は伝統的なアンチキリストの表象である。「迷妄」は、「幾重にももつれて折れ重な」(I.i.15.3)の尾をもち、赤十字の騎士を見ると巢穴へと「引き返そうとした」(16.6)。この様子は「逃げるへびレビヤタン、曲がりくねるへびレビヤタン」(イザヤ27:1)を想起させる。「迷妄」の本質はその吐瀉物中の「本や小冊子、[中略]蛙や蝦蟇」(20.6-7)に表われている。依然続いていた新・旧教の対立を背景に異端の教説や偽預言とされる言説は当時後を絶たず、こうした世情を反映してか、ジュネーブ聖書は、「龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた」(黙示録16:13)という箇所、これらの汚れた霊が意味するのは「大悪魔である教皇の召使い、蛙のように始終ゲロゲロ鳴き喚き、アンチキリストの口から出てくる者ら。何故なら、彼らは嘘しか言わないからである」と注釈している。これを踏まえれば、書物や蛙を吐く「迷妄」は教皇の手下で、人々を惑わすアンチキリストである。「迷妄」は騎士の「信仰」の盾を攻撃し(18.6)、尾で巻き付いて自由を奪う(18.7-8)。彼はユーナの助言により辛くも「迷妄の果てしない罫」(18.9)を脱し、怪獣を絞め殺す。

赤十字の騎士の前に現れる第2のアンチキリストは、魔術師アーキメイゴーである。粗末な庵で勤行に励む老隠者の姿をした彼は、質素な身なりで清貧を装い、「見るからに真面目そうで、賢者のような落ち着きがあり、つつましやかに目を伏せ、見かけは素朴で、悪意のない人に思え」(29.5-7)、熱心な祈りと悔い改めの身振り(29.8-9)を示す。「聖人や教皇の話」を語る合間に「アヴェ・マリア」(35.8,9)を唱えることから、カトリック信者とわかる。彼は丁寧に騎士にお辞儀をし、自分の庵に一泊するよう

言葉巧みに誘う。

「自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」者(テサロニケⅡ 2:4)とは個々の悪辣な教皇もしくは教皇座自体を指す、という見方は宗教改革前のイングランドにも存在した。¹⁴ だが、宗教改革以降、ローマ教皇座自体がプロテスタント教会を迫害するアンチキリストとして定式化される。とりわけエリザベス1世治下のイングランドでは、アルマダへの勝利(1588年)は神の摂理の表れであるという考え方が高まり、イングランドと英国教会の最終的な救済への待望が強まると、国教会こそ「真のキリスト教会」であり、ローマ教会は「アンチキリストの情婦である偽善の教会」¹⁵ であるとするジョン・ベイルらの議論が広まった。¹⁶ アーキメイゴーは教皇ではないが、上述のカトリックの隠者としての表象は、国教徒の読者にとって、彼の謙譲、清貧、賢慮、善意といった美德や熱心な信仰の身振りが偽りであることの明示的メッセージである。『農夫ピアズの夢』の主人公が眠りの中で見た高位聖職者の姿のアンチキリストが「真理を切り捨て、[中略] 偽りを育てる」(i. 20. 51-64) のと同様に、アーキメイゴーも偽のユーナの不貞を見せて赤十字の騎士を激怒させ、ユーナ(真理を表す)を捨てるようにしむける。後に偽の「神の武具」をつけて聖ジョージに化けたり(ii. 11)、信心深い巡礼の姿で偽りを述べる(vi. 35-36)ように、アーキメイゴーは聖者や賢者を装って神聖と美德を騙り、誠実と信仰の身振りで悪意を覆い隠して人々を真理から遠去けようとする偽善者、詐欺師である。

ユーナと別れてすぐに赤十字の騎士は、「信仰なき異教徒」(ii. 12. 6)の騎士サンズフォイに出会う。赤十字の騎士が帯びている十字架のしるしへの敵意を示すサンズフォイは第3のアンチキリストである。彼は真紅の衣装と黄金、真珠、宝石で身を飾った愛人のデュエッサ(ここではフィデッサ)を伴っている(ii. 13)。彼女の表象は明らかに「紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾」った『黙示録』の「大淫婦」(17:4)を連想

させる。上述のバイルの『二つの教会』の序文でも「薔薇色の淫婦、アンチキリストの情婦」¹⁷とあるように、「大淫婦」をアンチキリストの情婦とするのは当時の伝統的かつ一般的な理解であった。赤十字の騎士は「信仰」を表す盾に守られてサンズフォイを打ち倒すが、その後、慎ましい様子で美德を装うフィデッサに魅せられた彼は、以後彼女を仕える貴婦人とし、「高慢の館」へと導かれる。

「高慢の館」では、兄サンズフォイの復讐に燃える弟サンズジョイと赤十字の騎士の一騎打ちが行われる。フィデッサはサンズジョイに彼の愛人になって援助すると申し出る (iv. 48. 6、51. 8-9)。「神の武具」の威力を否定し (50)、大淫婦を情婦としてその助力を得る異教徒サンズジョイは第4のアンチキリストと考えてよいだろう。「一人は邪を、一人は正しさを求めて戦った」(8. 1、9. 1)と善対悪の構図が強調されるなか、両者は互角の死闘を続ける。だが、やがて赤十字の騎士は「正しさを求めて」というよりも「激しい怒りと血腥い復讐の炎」(v. 14. 5)に燃え、「血に渴き」(15. 2-3)、相手と同じく「激怒」、「貪欲」の大罪に陥る。勝者と判定された赤十字の騎士は「高慢の館」へと凱旋し、「不信仰」を表す盾と「高慢」の女王の愛顧を与えられるが、これらは霊的には極めて危険な報償である。館では、さめざめと泣くフィデッサに付き添われて赤十字の騎士は豪華な寝台に身を休める。その様子は、餌食を喰う際に涙を流すと信じられた「残忍で悪賢い鰐」(18. 4)に知らぬ間に呑み込まれる「愚か者」(18. 7)に喩えられている。イスラエルの民を迫害したエジプトのファラオがしばしば「鰐」に喩えられることを勘案すれば、赤十字の騎士の命を狙うアンチキリストの情婦が「鰐」と呼ばれるのは適切な喩えである。実際、館の地下牢には墮罪の末に破滅した夥しい数の人々が惨めな様子で半永久的に閉じ込められている。これを発見した侏儒の注進により赤十字の騎士は辛くも破滅を免れる。

だが、逃げ出した騎士が「神の武具」を脱いで休んでいるとフィデッサ

(デュエッサ)が追いつき、二人は「楽しさに浸る」(vii. 4. 2)。傍らの泉は、狩猟中に休んだお供のニンフに立腹した女神ダイアナの命により、飲めば気力が萎える水を湛えている。その水を飲んだ騎士は悪寒と衰弱に襲われる。D. J. Glessはこの場面をパウロの言う「霊の競走」の途上で休むことの危険性と結び付けて解釈している。¹⁸ 今、真理から離れ、虚偽の術中にはまり、悪の力に抵抗して勝ち抜くための「神の武具」を手放し、力も萎え、彼は「霊の競走」から脱落しようとしている。だが彼はなおもデュエッサを楽しませ、危険に気付かない。そこへ、第5のアンチキリストである巨人オーゴリーオーが襲いかかる。騎士は「神の恩寵」(vii. 12. 3)により巨人の打撃を辛くもかわすが、あおりで転倒して失神し、土牢に閉じ込められる。マッギンによるとアンチキリストは伝統的に巨大な体躯の人物として描かれ(223)、ダンテの『神曲』の「煉獄篇」(32. 148-53)で「大淫婦」と戯れる好色な「巨人」はアンチキリストと解されている。¹⁹ オーゴリーオーも「背丈は最も背の高い人間の三倍以上」(vii. 8. 9)の巨躯である。彼は情婦のデュエッサと戯れ(viii. 5. 5)、彼女に「金糸の飾りのついた深紅の衣」(vii. 16. 3)を着せ、「七つの頭を持つ恐ろしい怪獣」(18. 8)の上に座らせた。これは「大淫婦」の図像に他ならないが、語り手はさらにローマ教皇の権威の象徴である「三重冠」(16. 4)を加え、巨人とその情婦がローマ教会に与していることを明示する。巨人の城の床にまかれた「無垢な赤子の血」(viii. 35. 6)はヨアキムら多くの学者がアンチキリストと見なすヘロデ王がイエス・キリストの誕生を阻止しようとした乳幼児の大虐殺を連想させる。また、「罪なき正しい人々の血」(35. 6)、「信仰厚いキリスト教徒の血」(36. 3)、「聖なる殉教者たち」(36. 4)の血がその上で流された「祭壇」(36. 2)は聖餐の教義をめぐる新・旧教の対立を想起させる。聖別されたパンと葡萄酒はミサ中にキリストの肉と血に実体変化するという「化体説」はローマ教会の正統教義だが、英国教会はこれを誤謬とした。²⁰ 「祭壇」はこの対立の「場 (locus)」であったと言える。故

に、巨人の祭壇上で「悪意と暴虐の餌食」(36.5)となった人々は国教会の教義に「死に至るまで忠実」(黙示録 2:10)であった者たちであると解せる。

巨人の土牢に長らく幽閉され、真の教えを与えられず極限の霊的飢餓に衰弱した赤十字の騎士は、「神の恩寵」への信頼を忘れ、死こそが解放をもたらすと考える (viii. 38. 3-4)。それ故、彼は「神の恩寵」の働きを表すアーサーによる救出を「死の訪れ」(38.9)として歓迎する。赤十字の騎士が「絶望」の住処に乗込んだのは、ユーナも心配するように、霊的衰弱からまだ回復しない危険な状況下であった。惨めな姿の悪賢い男として描かれる「絶望」は、万物には全能の神が定めた終りの時がある (ix. 42.)、と述べ、死の不可避性を強調する。さらに、赤十字の騎士が罪を重ねてきたことを糾弾し(46.3-4)、罪の対価として最後の審判で下されるのは「死」であって、それが神の掟だ (47.5)、と断言する。「絶望」が言う「死」とは永遠の憩いを許される者たちが免れる「第二の死」(黙示録 20:14)、すなわち永遠の滅びを意味する。「絶望」は、一見神の正義を説きながら、神の慈悲を巧妙に隠蔽し、罪の自覚に苦悩する騎士から「いつかは慰めを得られるとの希望を摘み取ってしまう」(ix. 29.5)。神の言葉を語るふりをして救いの希望を奪うこの男はアンチキリストに他ならない。まだ霊的に衰弱し、「神の恩寵」への気付きが困難な騎士は、神の「永遠に燃える怒りの炎」(50.3)しか考えられず、恐怖に惑乱して自殺しようとする。そこへ駆けつけたユーナは「心を迷わせてはなりません、[中略]心を誑かされてはいけません」(53.2-3)と彼の脆い心を叱責し、救いへと選ばれている彼がなぜ絶望するのか、神の正義による有罪判決は、神の恩寵によって塗り消される (53.4-8)、と説く。この言葉に赤十字の騎士は立ち上がり、すぐ馬にまたがって (54.1)、「神聖の館」へと導かれる。起立、騎乗という自律的行為は彼が自ら正しい道を選びとったことを示す。だが、それはユーナの言葉への信頼なしには起こりえなかったことである。

「神聖の館」で信仰、希望、愛を学び、罪を浄められ、自らの未来の列聖を知らされた赤十字の騎士は、悪龍の退治に向かう。第11篇「要旨」に見られる「あの年老いた龍」の語を『黙示録』で「巨大な龍」、「年を経たへび」と呼ばれるサタンの呼称と解すれば、その龍は終末に「火と硫黄との池に投げ込まれる」（黙示録 20:10）ことになっている。だが、『妖精の女王』の龍は赤十字の騎士が3日間の死闘の末に息の根を止める「血肉」である。龍の幾重にも巻いた長く巨大な尾（xi. 11. 1）は上述の『イザヤ書』の大蛇レビヤタンを思わせる。また、密集した鋼鉄板の鎧のような真鍮の鱗（xi. 9. 1-2）や火焰と黒煙を吐く口（26. 4、40. 2）は、密接した「盾の列」で背を覆われ、煙と炎を吐く『ヨブ記』の獣（41:15, 20-21）を連想させる。ユーナの両親の王国を荒廃させ、罪なき者の血を流すこの龍は、サタンにも比肩する強大なアンチキリスト、ヨアキムの言う第7の「究極の（もしくは最大の）アンチキリスト」を想起させる。

「信仰不足」か「罪の咎」のためにこれまで多くの勇者たちが龍の餌食となった（vii. 45. 8-9）。龍が吐く火焰が赤十字の騎士の「神の武具」を焦がすと、あまりの熱さに彼は「救い」を表す兜（エペソ 6:17）を捨てようと思う（xi. 26. 8）。また、龍は騎士の「信仰」の盾を尾の刺で射し貫く（38. 6）。だが、「神聖の館」で真の信仰を学び、罪を清められて霊的健康を回復した赤十字の騎士は、「救い（兜）」も「信仰（盾）」も決して手放さない。激痛のため彼は後退し、転倒するが、罪を洗い清める「命の泉」（xi. 29. 9）と死に至る傷を癒やす「命の木」（46. 9）に新たな命の力を与えられ、3日目に剣で龍の口を刺し貫く。龍は血を流して絶命する。人間の力も鋼鉄の刃も流すことができない龍の血を流させた騎士の剣の「不思議な力」（36. 5）とは、剣が表す「神の言（ことば）」（エペソ 6:17）の力である。これは、アンチキリストを打ち倒すのはイエスの「口の息」（テサロニケⅡ 2:8）であるとの記述を踏まえていると思われる。

第8のアンチキリスト

一度ならず脆い心に陥りながらも、信仰と救いへの希望を堅く保ち、遂には神の助力により龍を倒した赤十字の騎士は、聖ジョージとして未来の列聖を約束され、救済と永遠の憩いを既に手に入れた。ユーナは神を称え、彼女の騎士に感謝する (xi. 55. 8-9)。王国中の人々が迫害からの解放を喜び、赤十字の騎士を称賛するなか、ユーナの父である国王は彼女と騎士の婚約を結ぼうとする。その刹那、書簡を携えた急使が王宮に到着する。書簡は騎士を既にフィデッサと交した婚約を隠秘してユーナと婚約しようとする嘘つきであると非難し、これを読んだ国王は騎士に釈明を求める。使者とは実は魔術師アーキメイゴーである。彼はデュエッサと共謀して、赤十字の騎士を真理（ユーナ）から切り離そうと執拗に企むのだ。この企みの狡猾さは、フィデッサとの関係を騎士自身が完全には否定できない点にある。オーゴーリオーの襲撃の前、木陰の草地で彼は彼女と罪を犯したのか否か、テキストの記述は曖昧である。後に「絶望」にユーナへの裏切りを指弾された時も騎士は罪を明確に否定できなかった。今も、相手の女が嘘つきであることを申し立てるのみである (xii. 31-32)。この告発が虚偽か否か、フィデッサの素性を承知している善意の読者にさえ実は判然としない。先刻偉業を達成し、永遠の救いへと選ばれた聖者であることが証明され、皆が彼を称賛し、感謝している最中に、この悪意に満ちた中傷は彼の名誉を疑惑の中に陥れようとしている。

語り手の言葉によると、神に選ばれた者とはもともとから潔白なのではなく、「貴い（キリストの）血で、汚れた罪を清められた人々」(x.57.45)を指す。このため、人間は神の助けなしには悪以外の何事もしえない、と語り手は強調する (1. 8-9)。人間の本質的な罪深さと惨めさを深く学んだ赤十字の騎士には、自らを潔白と断言などできない。上の、アーキメイゴーがもたらしたデュエッサによる告発はこの点を突いている故に巧妙なのである。原罪を負う以上人間は不可避免的に悪へと向かうことを否定でき

ない。正直で謙虚な人々は、救済への不安に震えながら、生の「競走」を耐え忍ぶ他ない。その不安につけ込んで、まことしやかに疑惑を捏造しては不信感と根拠無き非難を周囲にかき立て、常人ばかりか聖者や徳高い人々の名誉までを貶めるこのような人間の悪意こそ、赤十字の騎士を襲う第8のアンチキリストと言えるのではないだろうか。

結論

『妖精の女王』第1巻に描かれているアンチキリストたちは、宗教改革を背景に定式化したローマ教皇座こそアンチキリストであるという国教会側の見方を土台としつつ、キリスト教を否定する異教徒、誤った教説を唱える者、教会の内に潜む偽善者や詐欺師、「大淫婦」と共謀して聖徒の血を流す暴虐な迫害者、神やキリストや聖徒を装う者といった伝統的な姿で登場する。その数が7者であるのもヨアキムのアンチキリスト観を踏まえている。ヨアキムは第7のアンチキリストの後に登場する「最終のアンチキリスト」を、終末に解き放たれたサタンが召集するゴグとマゴグ（黙示録20:8）であると考えた。『妖精の女王』における「最終のアンチキリスト」が何者かは、詩神が喇叭を吹き鳴らし、妖精女王と強大な異教の王との決戦の歌が始まる時に明らかになるだろう。だが、それまでの間もアンチキリストは次々と現れ、人間を背神へと誘い、真理から遠ざける。アーキメイゴーは、正体を暴かれて投獄されるが、ほどなく脱出し、その後も生の「競走」を耐え忍ぶ者たちを惑わし、実直を装いつつ悪意ある誹謗中傷で人々を陥れようとする。誹謗中傷する人間の悪意としての第8のアンチキリストは、『妖精の女王』第6巻では「悪意」、「欺瞞」、「中傷」の3兄弟が人々にけしかける「口喧しい獣」の姿で登場し、地上のあらゆる所を荒らし回り、捕縛されてもいつの間にか逃げ出す。有力読者からいわれ無き非難を受けて『妖精の女王』第3巻の結末の変更を強いられたと述べる語り手は、悪意に満ちた毒舌が「気高い詩人の歌をも容赦」（VI. xii. 40.

8) しないことを誰よりもよく知っていた。正直な人々の言われぬ恥辱と没落を喜ぶ第8のアンチキリストは、語り手にとって終末に至るまで常時、普遍的に人間を苦しめる人間悪の本質であった。赤十字の騎士の潔白はユーナの証言により証しされ、二人は婚約して至福の一時を過ごす。では、語り手の証しは誰が立てるのか。第6巻末尾の彼の決意、「だから、わが歌よ、一層よく拍子を整えて 喜ばすよう努めよ、それは今や賢者の宝と思われている」(xii. 41. 8-9) は、賢い読者に「賢者の宝」であると証ししてもらえよう一層精励し、詩人としての自らの生の「競走」を完遂して終末後の救いと永遠の憩いを得たいという彼の切なる祈りへとつながっている。

注

- 1 藤井先生は、*Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton* (アポロン社、1974) の後も引き続きスペンサー文学における「時」について考究を続けられた。なお、先生のスペンサー研究の概要については拙稿「藤井治彦先生のスペンサー研究について」(*OLR* 57, 2018) を参照されたい。
- 2 「叙事詩における「時」の克服——スペンサーとミルトン——」『時と永遠——近代英詩におけるその思想と形象』(英宝社)、pp.27-45.
- 3 使用テキストは Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, A. C. Hamilton ed., 2nd rev. ed., text edited by Hiroshi Yamashita and Toshiyuki Suzuki (Harlow: Pearson Education, 2007)。日本語訳の引用は、和田勇一、福田昇八訳『妖精の女王』(筑摩書房、2005) に原則として基づく。以後、括弧内引証においては作品タイトルを省略する。
- 4 聖書からの引用は日本聖書協会発行の『聖書』(1974) による。
- 5 同様の預言が「観想」の老賢者によってもなされる (I. x. 61)。
- 6 *OED* 初出用例は“apocalypticism”が1884年、“apocalypticism”が1889年。「黙示思想」の定義及び来歴については、*The Continuum History of Apocalypticism*, ed. Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein (New York: Continuum, 2003) の序文を参照。
- 7 エリザベス朝の黙示思想については、Richard Bauckham, *Tudor Apocalypse: Sixteenth Century Apocalypticism, Millenarianism and the English Reformation: from John Bale to John Foxe and Thomas Brightman* (Oxford: Sutton Courtenay Press,

- 1978)、C. A. Patrides and Joseph Wittreich, eds, *The Apocalypse in English Renaissance Thought and Literature: Patterens, Antecedents and Repercussions* (Ithaca: Cornell UP, 1984) を参照。
- 8 Bernard McGinn, *Antichrist: Two Thousand Years of the Human Fascination with Evil* (New York: Harper Collins, 1994), p.13.
- 9 英国教会 39 箇条 (1563)、第 17 条。
- 10 上記注 5 記載のテキストに付された Hamilton の注を参照。
- 11 McGinn, p. 26. 岡田温司、『黙示録——イメージの源泉』(岩波書店、2014)、p. 98。
- 12 *Epistola ad Gerbergam reginam de ortu et tempore Antichristi* (『アンチキリストの誕生と時代についての論考』) より。英訳版 (“Letter on the Origin and Time of the Antichrist”) は <apocalyptic-theories.com/theories/antichrist/Antichristtext.html> を参照。
- 13 *Liber figurarum* (『図像の書』) (13 世紀初め) に収録。
- 14 ウィクリフは教皇制度自体を聖書の真理を逸脱していると考え、アンチキリストであるとして指弾した。ラングランドも教皇を思わせる高位聖職者の姿でアンチキリストを描いている (『農夫ピアズの夢』 20. 51-64)。
- 15 John Bale, *The Image of Both Churches* (1541, 45, 47) in *Select Works of John Bale* (Cambridge: The university Press, 1849), p.251.
- 16 Bale の他、John Foxe, John Jewel, Edwin Sandys, Henry Smith, Thomas Brightman ら多くの神学者や著述家が盛んに論じた。
- 17 Bale, op. cit.
- 18 Darryl J. Gless, *Interpretation and Theology in Spenser* (Cambridge: Cambridge UP, 1994), pp. 117-18.
- 19 McGinn, pp. 171-72.
- 20 英国教会 39 箇条 (1563)、第 28 条。